

浄土

1986-9

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省特別投承認雜誌) 第三二五号
昭和六十一年八月二十五日印刷 昭和六十一年九月一日発行
第五十二卷 九月号





九月の秀句

新涼の山々にふれ雲走る

今井つる女

ひとり身の九月草樹は雲に豊み

野沢節子

さびしさは秋の彼岸のみづすまし

飯田龍太

九月号



眉間の白毫を見奉る者は、八万四千の相好自然にまさに現すべし。

——『観無量寿経』真身観文

目次

法話

彼岸随想.....吉川哲雄.....(2)

続 小学校と漢字教育曾田文雄.....(7)

＜連載＞ 一紙小消息 ⑭

極楽往生の悦び.....村瀬秀雄.....(16)

み仏とともに =18=

——み仏たちの群像——安居香山...(22)

＜ず・い・そ・う＞

老いのたわごと.....近藤良貞.....(12)

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記(十二).....木下隆一.....(28)

◇◇ 長篇連載小説 ◇◇

立ち止まるな善導 第27回

風含む山陵

.....寺内大吉.....(35)

挿絵 松濤 達文

表紙絵「くがい草」 松浦春子 画

彼岸随想



都会の慌ただしい生活の中に日暮ししている私達にとり彼岸の声を聞く時、何か今まで忘れていたものを思い出すような気がします。忙さに紛れ親の墓にも無沙汰した申訳なさと同時にその墓周辺のただずまい、あの丘の彼岸花、あの川辺の秋草の花、更に幼き頃の友垣のことども等、これは四季それぞれの風情に恵まれた我々日本人の彼岸を迎えての心情ではないでしょうか。

彼岸と言う言葉は一般には、特に俳句の世

よし かわ てつ ゆう
吉 川 哲 雄

(東京・文京区伝通院住職)

界では単なる季語に過ぎませんが、これは仏教と切り離して考えることは出来ません。戦前に於ては春秋の彼岸の中日を皇霊祭として神道による宮中行事が行われて居りましたがこの一週間を通じての行事は印度や中国に於ても行われず、日本独特の行事であり聖徳太子による仏教的遺法であると言われて居ります。彼岸の語は梵語のパラミッタの意であり到彼岸と訳されて居ります。彼の岸(涅槃、悟りの世界)の意であり、此岸(迷界、娑婆)

に對する言葉であります。貪（むさぼり）瞋（いかり）痴（おるかき）の三毒煩惱により日々生死の海に漂い生活して居る吾々にとりこの世界は窮極の理想界であります。智度論に「生死を以て此岸とし、涅槃を以て彼岸となす」と記されて居ります。この理想世界の彼岸は我々念仏門に於ては浄土であり極樂世界として西方にあると説かれて居ります。阿彌陀經に「これより西方十万億の仏土を過ぎて世界あり。名づけて極樂と云う。仏まします。阿彌陀と名づけ奉る」と記され、この西方浄土に往生することを以て悲願とし、他力本願の念仏を以てその行法として参りました。この信仰を端的に示すものに大阪四天王寺の西門は極樂浄土の東門に当り、ここが浄土への入口であるとの信仰から中日には多くの善男善女がこの寺に詣り太陽が真西に沈む灘波の海に向つて合掌念仏したと言われ、今日でも彼岸にこの寺に詣でる人が多いと言われて居ります。これは極樂の莊嚴を觀察す

る方法として釈尊がイダイケ夫人並に後世の衆生の爲に示された十六の觀法の中の日想觀によるもので觀無量壽經の中に「汝および衆生まさに心を專にして念を一処にかけて西方を思ふべし。（中略）目ある徒みな日の没するを見よ。まさに想念を起して正座して西に向い諦かに日を觀ずべし。想を專にして移さざらしめて日の没せんと欲してかたち懸鼓のごとくなるを見よ。すでに日を見終りなば、目を閉ぢ目の開かんにみな明了ならしめよ。是を日想とし名づけて初觀という」とあります。さて、この岸より彼岸に到達する道について、各宗の祖師によりあるいは坐禪、又は唱題等多くの教が説かれて居りますが、通仏教的な立場から六つの道が示されて居ります。これを六度又は六波羅蜜と申します。即ち仏の示された五戒、殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒等の戒、更には八戒十戒等の戒律を厳しく守り日常生活を正しく律して行く持戒、又兎角散亂し勝な心を一処に留め安心立命の境

に住する禪定、又眞実の知を極めて宇宙の真相を把える智慧を極めることなどが古くから示され、これを三学と云い、法然上人も「仏教多しといえども所詮、戒定恵の三学をば過ぎず、所謂小乗の戒定恵、大乘の戒定恵、顯教の戒定恵、密教の戒定恵也」と述べられて居ります。更にこの三学の外に布施、忍辱、精進の三を加えて六度とし、これらを修することにより此岸より彼岸に至る渡し船として明示されて来ました。今六度の一々を説明をする紙幅はありませんが、この中で現代の世相から見ても布施について少しく考えて見たいと思います。この布施は他の持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の五度と少しく性格を異にして居るように思われます。これらの五度はこれを行ふことにより究極に於ては彼岸に達し、仏果を得て慈他行になると思いますが、直接には自行でありましょう。只この布施は直接愛他心の行であります。布施とは檀の意で梵語のダーナーの訳であります。

日常使われている檀那樣、檀家、檀那寺の檀でこれは他に対して施与することを意味します。最近檀那樣と言う言葉が少くなり、主人とかマスターとか呼ばれて居りますがこれは社会構造の変化によりこの布施の眞意が失われた結果ではないでしょうか。この布施について本地経に「施に二種あり。一には財施、二には法施なり。種々の飲食・衣服・資産・灯火・医薬等を分ちて他に恵玉を財施と云う。広く他の為に正法を宣説し初語もよく、中語もよく、後語もよく他をして聞き終りて解脱せしむるを法施という。この二施の中に於て法施を以て妙勝第一となす」と説かれ、これを今は亡き椎尾大僧正は「眞の法施とは社会の精神生活に貢献することである」と現代的に述べられて居ります。即ち財や物を施す財施と法を施す法施であります。この点から見ても、檀家と檀那寺との本来の姿はこの二施の関係にあると思いますが、近来この眞の意味が薄れ形骸化して居るように思われます。

ことは淋しいことです。さてこの二施の内財施を考えてもこれは財力のある者によつてのみ可能であり、貧しく資力のない者にはその実行は不可能です。又法施にしても学徳があり、一般民衆に対して教化能力のある者にして初めて可能なことと思われまゝ。然しこれらをして得る者は極めて少く、一般大衆にとりこの実行は不可能であります。然らば一般人はこの二施を行ふことが不可能なため彼岸に到達することは望み得ず、従つて仏果を得ることは望み得ぬ所であります。そこでこれに代る救いの手として、無財の七施という布施行が示されて居ります。即ち眼施・和顔施・言施・心施・身施・床座施・房舎施の七施であります。眼施とはやさしい眼で人に接すること、眼は心の窓の言葉の通り慈眼はその人の慈悲心を現します。和顔施とはにこやかな顔で人に接すること特に相手の言葉を親切に真心をもつて聞いてやることが大切です。言施とは愛情のこもった言葉で人に接す

ること、日常生活で何の気なしに使つた一言が人の心を傷つけることもあれば、その一言が人の心を暖めることもあります。特に昨今の社会生活に於て忘れられた心の言葉の何と多いことでしょう。かつてある寺の伝道板に次のようなことが記されてあるのを見ました。「はいと云う明るい言葉、ありがとうと云う感謝の言葉、すみませんと云う懺悔の言葉、させて頂きますと云う奉仕の言葉」誠に考えさせられる文ではありませんか。心施とは相手の心になつて人に接してやること、この心施があつて初めて眼施も和顔施も行われることと思います。これは人と人との間だけでなく、集団と集団更には国と国の間に於ても考えられることであり、そこから和の世界が開けてくると思います。次に身施とはその言葉通り身体を以て他に施す行であり、いわゆる社会奉仕の姿です。特に自己宣伝の爲でなく、人知れず黙々と行ふ姿です。「無縁仏への供養とトイレの掃除は最高の陰徳を作

る」と言われて居ります。次に床座施とは人に席を譲ることであります。近年、バスや電車の中に老人や力弱き者のために特別の席が設けられて居りますが、若者が平然と座り、老人が疲れた体を釣皮にもたれて居る光景を時折見ることがあります。これらはこの施行とは全く反対なものであります。次に房舎施とは、困って居る者のために自分の家を提供してやることです。お遍路さんに宿を貸すとか、広い家ならば町内の会合に使ってもらうとか、難民などを受け入れてやるのもこの施行です。

以上の財施・法施又無財の七施にしてもこれを行ずる上に最も肝要なことは、その施行に対して報酬を求めぬ精神です。これだけしてやったのに何の返礼もないと言う心です。いわゆる無所得の行です。自己宣伝の為の布施行は真の布施とは言えません。「拝む手でそつと揃える人の下駄」の精神です。

以上布施行につき略説いたしましたが、は

たして自分の問題として真剣に行ずることは可能でありましょうか？ 六度の中の一つ、無財の施行の中の一行さえ完全に実行されましようか？ 自分の全財産を、又家庭を更には自己を犠牲にして他に施与することは困難です。この深い内省の立場に立って法然上人は、「我戒行に於て一戒も保たず、禪定に於て一つも得ず」と嘆ぜられ、永年のご苦勞の末に、他力本願念仏の道に光明を見出されたのであります。秋彼岸を迎えるにあたり、我々凡愚の彼の岸に到達する道は険しき自行の道ではなく、唯々一向に念仏の渡船におすがりするほかに道はないと思ひます。

法然上人秋のお歌

阿弥陀仏あみだぶつに染むる心の色にいでば

秋の梢のたぐいならまし

続 小 学 校 の 漢 字 教 育

曾^そ田^だ文^{ふみ}雄^お

(広島文教女子大学教授)



一

漢字教育なるものは、前回にも記しました通り、仏教とは無関係でなく、加えて宗門寺院や檀徒の皆様の中には、小学校で教鞭を御執りになっていらっしゃる方もございました。う。また子・孫を小学校に通わせていらっしゃる向きもあろうかと存じ、今回も亦引続いてお話してみようと存じます。

前回のような書き方をすると、皆様は、一見挙げ足とり乃至は「毛を吹いて疵を求む」の感を御持ちかも知れませんが、前回の終り

に掲げた、「記(二年)——己(六年)」の類は、あんな程度では済まないのです。

花(一年)——化(三年)
紙(二年)——氏(四年)
鉄(三年)——失(四年)
泳(三年)——永(五年)
活(三年)——舌(五年)
炭(三年)——灰(六年)
係(三年)——系(六年)
線(三年)——泉(六年)

のような有様です。

このくらい示したら、きつと皆様だって、

筆者同様、もう少し何とかならないものか、と慨嘆なさるのではないでしょうか。

二

ならばどうして、そのような無駄なこと、時には順逆さかさまな教え方が漢字に対して採られることになったのでしょうか。

当事者に尋ねるのが一番手取り早く間違いないやり方ではありましょうが、筆者なりに右の諸点について考えてみました。

教育漢字表を一覧すると、一つの傾向のあることが窺えます。それは、ことばの性状の面から、物品で類似したもの、同一線上にあるもの、関連したものが、特定の学年で一まとめにして教えるべく仕組まれている、ということです。就中、この傾向は、一・二年に特に著しいように見受けられます。

即ち、「上・中・下」「一・十」（数字）「大・小」「男・女」のように、一まとまりのことばがまとめて一つの学年に集中させてあり

ます。右掲のものは、共に一年で修得する漢字です。他にも「山・川」「青・赤・白」が一年で教えられます。

また、「新・古」「東・西・南・北」「朝・昼・夜」「売・買」をどは二年で習います。

その際、右の「山・川」について申すなら、これらは一連の組をなすことばであるに違いなく、一つの学年内に配当したその配慮もよく承知できる点ながら、関連あることばは、これ二語とは限らず、「谷」だって同じ並びに置くことも許される筈。しかるに、その「谷」は二年で習う文字。色彩でも、前掲した通り、「青・赤・白」は一年の字なのに、「黒・（茶）・黄」は二年に廻されておりま

す。「新・古」にしても、事のついでに「旧」（五年）など一緒にまとめてはどうでしょうか。また「朝・昼・夜」にしても、関連のある「夕」は一年に置かれ、「晩」に至っては六年生で習う、という具合。

ここらあたりにも一工夫が加えられて然るべきか、と存じます。

三

何故、かく関連するものを一つの学年内でまとめきれないのか。

理由としては、余りにもきまり文句にこだわり過ぎ、学童の立場での発想に基づいていない、ということが出来るように思います。

確かに、現在採られている方法も、抛るべき親切的な、理解させる上で簡便な手段であることは認められます。しかしそれならば、それ一本に徹し、他の字をも包括する考えを貫くべきではないか。にもかかわらず、「明」「長」を二年に置きながら、「暗」「短」は三年に延ばす、乃至は、「海」は二年に、「陸」は四年に、といった配当ぶりなのはやはり問題が残ります。「寒・温・暑」を三年次に括りながら、「冷」は四年、「暖」の如きは六年、という具合に離されてある点など、もっ

と考えて欲しいものです。

先程の色彩で、「青・赤」を一年に置く、と申しましたが、一方「黄」は二年、「緑」は三年のように配されておりますけれども、これなど、学童の立場からするならば、例の交通信号と結びつけ、これらを一まとめにして一向に差支えない筈。字の画数が云々のことなど全然問題とはなりませんまい。

そういえば、漢字の組立ての具合、この点をもっと加味してみては如何なものでしょう。

「木・林・森」と共に「本」が一年に出ます。これはどんな理由で置かれたのやら分りませんが、この場合、「木」と「本」とに關してなら、いわゆる六書の一つ「指事」なる方法を導入しつつ、つまり、「木」を中心に、その「モト」の部分を示すのに横棒を下に引くのが「本」、「スエ」の部分を示す横棒が上にあがっているのが「末」のようにして教えたなら、学童の理解、記憶は一層早ま

るのではないか、と考えます。因みに「末」は四年で習う漢字です。

四

長々と、漢字教育について、その教授法ということ、工夫を凝らして欲しい点を述べてまいりました。

漢字の学年配当ということは、成程困難な作業であるに違いありません。けれども、漢字というものは、音と訓を兼ね具えた文字であり、幾つかの要素が寄り集って一字を構成する場合が多々あります。ですから、漢字の意味する面をも、単にことばの面だけから配当を行うばかりでなしに、その構成面からも更に加味して行って貰いたいと思います。

事のついでに、漢字教育上、勿体なく感じられる件について、もう一つだけ述べておくことにします。

教育漢字は、常用漢字の一部を抜粋して選ばれております。したがって、教育漢字以外

のものは、小学校を終えて後に覚えることになるわけですが、小学校の課程内で、今のやり方を変えずに、さ程面倒な作業を経ることなく、もっと新しい文字を教え込める面が残されております。換言すれば、既に字形は教授済みであるにもかかわらず、それを独立した文字として扱ってはいない、ということなのです。

「増」に例をとりました。この漢字は五年に出ます。生徒は、既にこの字が「土」と「曾」から成るものだということは十分承知できる筈です。更に「曾」の形は、翌年にも「層」なる漢字を通じて学びます。しかるに、その「曾」は遂に小学校では、単独の漢字として教えられることがないのです。この文字は、常用漢字中に、別に「僧」が含まれていながら、遂に枠内には加えられなかったのです。余り使用しない、ということに原因しております。うけれども、切角覚える字形なら、これも教えておいたって、負担が増

えるわけではなし、問題ないと思うのですが、何も筆者の姓名の一部に、この文字が含まれているから、ということでは主張するつもりは全くございません。

これに類した例を並べておきます。

「械」は四年に配当されておりますのに、旁りの「戒」は、常用漢字内には載っていても、教育漢字からは外されております。

「統」は五年が習う文字です。その際、この文字の構成部分、扁の「糸」は教育漢字に含まれること当然なのに反し、旁りの「充」は教えられない儘で終ります。

「綿」も同様五年に配当されてありながら、「帛」は教育漢字に含まれません。

「談」も五年で学ぶ文字。なのに「炎」は単独では教えられないことになっています。

「程」も五年の字。しかるに「呈」は、常用漢字にさえ採られなかった文字です。

「菜」は四年で学びます。この「采」の形は、更に五年の時「採」という文字を習うに

際し、再度覚ええます。それであるのに、「采」は、到頭学ばないでしまふ。おまけに、常用漢字からも除かれているのです。

くわしく見ていけば、尚、他にも探し出せるに違いありません。何れにせよ、誠に勿体ない、とは思われませんか。

生活上、頻度数という見地から、余り使われない、書く機会が少ない、というだけで、学童が負担なしに知り得た文字を生かさなない、ということは何としても惜しい限りです。

「サイタサクラ読本」は昭和八年、筆者が一年入学の折、新しく採用された本です。それ迄「ハナ・ハト」式の単語から入ることに對して、文の形から教えるという画期的なものでした。漢字も、左様な流れに沿って、よく用いる文中に出る出ないの尺度だけから選別されたきらいがある如く見受けられます。しかし、一つでも知識を増やす為、たとい常用漢字内には含まれずとも、教えてならない筈はなかりうに、と考えますが如何でしょう。

老いのたわごと

私は今年の五月一日で満八十四歳になった。

三十三年前に咯血して倒れたことがある。ストマイの注射が続けられ、絶対安静の療養生活を命じられたときは、六十まで生きられたら御の字だな、と観念した。それでも、友人から「模範患者第一号」とからかわれるほど、医師の指示に絶対服従して、療養に専心した甲斐あって、一年余り経つと監禁が解け、会社へ出ることを許された。

その後しばらくは、だいぶ要心した。が、そのうち慣れるに従って、もう大丈夫とタカをくくって、少し調子に乗ったのが悪かった。その後四、五年のうちに続けざ



近藤良貞

(暢高街製作所相談役)

まに、肋膜炎を患ったり、胆石のために開腹手術をしたりした。

しかし、その都度「模範患者第一号」の本領を発揮して、医師の指示を忠実に守り養生に努めたので、これらの大病もうまくぐり抜けられた。そして知らぬ間に、かねて覚悟の六十路の坂を越してしまったのである。

それ以後は、極力無理をしないように要心したお蔭で、病氣らしい病氣はしたことがなくて、気がついてみたら八十をとくに過ぎていた。

いまでも毎日会社に出ているので、はた目にはすこぶる元気で齢よりは若く見えるらしい。

先日、九州に住んで居るある後輩が、数年振りに上京したといって訪ねて来てくれたのであるが、最初の挨拶が「お元気ですなあ、幾つになられました」というのであった。

「八十五だよ」というと（これは別段鯖を読んだわけではない。わが国ではむかしから終戦時までは、年齢は数え年で呼ぶ慣わしであった。明治生れの私にはそれが当然の如く既成觀念となつていたので、このときも何のこだわりもなくすらすと、八十五と口から出たまでのことである）「へエー、驚きましたね、とても八十五とは見えませんよ、お若いですなあ」と褒めてくれた。

普通ならば「ありがとう、お蔭で」と愛想よく挨拶を返すべきところなのであるが、お互いに気心がよく解つてゐる親しい間柄なので、ついついもの悪い癖が出て、「お世辞はよせ」と素っ気なく突っぱねた。しかし腹の中はそれとは裏腹で、満更悪い気はしなかった。

いまわが身辺を見廻してみると、同年輩の友人の大半は次ぎつぎと、帰らぬ旅に立つて行つた。生き残つてゐる連中も、寝たきりとか、脚腰が弱つて歩行もままならぬというのが多い。それを思えば、こうして毎日会社に

出ている私は、齡の割には元気な方であると自惚れてもいいのかも知れぬ。

ところがである。最近になつてその自惚れにかげりが出てきた。近頃とみに肉体の衰えを感じるようになったのである。

私は永年の習慣で、出社のときは、ビルの五階に在る事務所へ行くのに、エレベーターに乗らないで、階段を歩いて上るのであるが、去年までは地階から五階までの百二十段ばかりの階段を、一気に登りつめた。それがここ一年来、途中まで来ると、息切れがしてくるわ、脚がだるくなるわで、ちょっと足を止めて一息入れることが多くなつた。

また、私の道楽の一つに自称古本屋散歩なるものがある。暇を盗んでは地下鉄の大手町駅から神保町に出て、古本屋街を一わたりのもぞき歩き、また地下鉄で大手町駅に戻つて会社に戻るのであるが、最近では会社に辿り着いて椅子に腰をおろすと、しばらく呼吸を整えないことには好きな煙草に手が出ない有様である。

肉体の衰えは必然的に精神にも強い影響を与える。西洋の諺に「健全なる精神は健全なる肉体に宿る」という

のがあるが、私はこの年になって、その真実性を痛切に感じるようになった。

少し体の調子の悪いときは、読書もうとましく、ものを考えることも面倒くさい。調子がよくても、少し根をつめて本を読んだり、調べものをしたりすると、二時間経つか経たないうちにくたくたになって、本やペンを放り出してソファ―に横になる。

心身の老衰は覆うべくもない。その齢になればそれが当然だ、と人は言うかも知れないが、私にしてみれば、なんという体たらくぞと情けなくなる。

こう書いてくると、俺はもう駄目かと悲観しているかのように受けとられるかも知れないが、実際は心ずしもそうではない。客観的には心身の老衰を認めながら、心情的には困ったなあと思う程度で、別段深刻に受け止めているわけではない。

冷静に今日現在の自分自身のことを考えてみると、もう余命幾ばくもないのだということを認めざるを得ない。誰が何と言って慰めようが、死は数年後に迫っているということは絶対に否定できない。これは厳粛な自然の法則なのである。自然の法則には何人も逆らうことは

できないのだ。

理性の上では、そのことが解り過ぎるほどよく解っている癖に、それは何か他人事のように感じられるのである。『この自分自身』とは全く関係のない第三者のような『私』に対する観察なのである。なんともおかしい心理現象である。

毎朝食事を済したあとで二、三の新聞に目を通す。いつの頃からか読むパターンがきまってきた。先ず最初に見るのが、第一頁から三頁、時に五頁くらいまでわたつての下段の新刊書の広告。次が社会面の下段の知名の士の死亡記事。それが済むとまた第一頁に戻って、ゆっくりとページをめくりながら、政治や経済に関する記事を読む、という段取りである。

ここで問題は知名人の死亡記事である。

七十台で死んだ人には、まだ若いのに気の毒なと同情する。八十そこそこの人だと、それほど年寄りでもないのになあと思う。九十台の人の死んだ報に接すると、ここでやっと、よくまあ長生きしたものだなと感じ入る。先日もある知人が九十歳で亡くなった記事を見て、ああ九十か、それじゃあ仕方がないな、と呟くと、側に居た

妻がそれを聞きとがめて「あなた人ごとではありませんよ。あなたも九十まではあと四、五年しかないんじゃないですか」と言った。「ああそうか、そうか、そうだな、これはチト忙しくなってきたな」といつもの軽口でやり合った。それはごく軽い気持ちで言ったまでのことで、決して深刻な感情から出たものではない。

多くの人の死を、いやというほど見ながら、自分の齡は忘れていて、自分だけは例外だと錯覚しているらしい。自分が死ぬるなどとは夢にも思っていないのである。その癖一方では、ここまで来たらもういつ死んでもよいと思っている。

いつ死んでもよいとは思っているが、そうかといって、いま死んでもよい、とか、いまのうちに早く死にたい、などという考えはいささかも浮んでこない。それどころか、自分はいつまでも生きておれるものと思っているのである。何となれば、現にこの通り三度の食事はおいしく食べるし、毎日キッチンと会社に出てピンピンしているのだもの。

ところで、「いつ死んでもよい」という気でいられるのはなぜだろうか。

もし、家族に気がかりなことでもあったら、とてもこんなわけにはいかぬ。さらにまた、なにかやり残したことであったら、やはり未練が残るだろう。幸い、私にはそんな悩みはない。

「それより近藤さん、あなたは、自分は死んでも地獄へ落ちる筈がない、と安心しておられるからじゃないんですか」

親しい後輩がそう言ってひやかした。

別段、善行を積んだわけでもなければ、信心深いわけでもない。しかし言われてみれば、あの世へ行つて、仏様や閻魔さんに文句を言われる筋合いはなさそうだ。なるほどそうかも知れぬ。いずれにしても、こんな気持ちでおられることは、なにより仕合せというべきだろう。

いつ死んでもよいが、苦しみなから死ぬるのは嫌だ。私が尊敬しているある名医が、「楽に死ぬ方法は長生きすることだ」と教えてくれたことがある。これから精々健康に気をつけて、長生きすることに努めよう。

なにやら矛盾だらけのことを、くどくどと繰り返したべたようである。これはまさに語るに落ちた老碌の正体暴露というところか。呵々。

極樂往生の悦び

村瀬 秀雄
むら せ ひで お

「生れがたき浄土に往生せん事悦びの中の悦びなり」

極樂浄土の莊嚴は眩しいばかりの光明に輝き、その中に七宝の宝樹、宝池、宝樓閣その他が具わっている。阿弥陀仏がましまして説法し給うているばかりでなく、妙鳥の声や小波の音までが法を説く声として聞かれ、往生人は自然に智慧を増進してゆく。このように

勝れた極樂浄土に往生するには、念仏の行以外のどのような修行によってもできない。經典は次のように説く。

「舍利弗よ、極樂浄土はこのように勝れた世界であるから、念仏以外の各種の修行による雑善や小さな福德の修行によつてでは往生できる因縁にならない」（阿弥陀經）

念仏を唱えれば往生の行として多善根、大善根、勝善根が得られるのであるから、煩惱



を具足している凡夫といえども往生できるのである。善導大師は次のように説いた。

「凡夫は煩惱の障りだけについていえば、自分の力で往生できるわけがない。しかし幸いにも阿弥陀仏は念仏往生の本願を成就し給うているのであるから、念仏を唱える者は必ず往生できる。小乗を修行している声聞でも、煩惱を具足している凡夫でも仏の慈悲に随つて本願に乗ずることができれば必ず往生できるのである」(觀經玄義分)

ただし念仏を唱えるのに仏の教えを心から信じていなくてはならない。もし疑う心を持っていると、念仏を唱えても極樂浄土の辺地にある宮殿にしか往生することができない。

經典は次のように説く。

「汝らはよろしく精進し、それぞれに心で願うところを求めなくてはならない。決して疑ったり中途で後悔したりして自分から過ちを犯してはならない。もし仏の智慧を疑うことがあれば、極樂浄土に往生しても辺地にある

七宝の宮殿に生れ、五百歳の間は仏を見奉ることができないという災難を受けることになる」(無量寿經)

阿弥陀仏の智慧には五つの特色がある。一には仏の智慧は悟りの仏智であること。二には他から知り得ない不思議智であること、三には言葉でいい表わすことができない不可称智であること、四にはすべての者を救い尽して、生死の大海を渡らせる大乘広智であること、五には他に較べるものがない最高に勝れている無等無倫最上勝智であることである。仏はこのように勝れた智慧を持ち給うているのに、それを疑って罪深い者は念仏を唱えても往生できないかも知れないと思う者があつた。このような疑いを持ちながらも念仏を唱えていれば、仏の慈悲は辺地の宮殿まで往生させ給うのである。これこそ仏が人々を見捨て給うことがない仏恩なのである。証賢は次のようにいった。

「辺地に往生する者は、この世にあつた時に

仏の智慧を疑っていた者である。仏の智慧には計り知れない不思議な力があって、小さな功德でも大きくし、重い罪業をも軽くすることができる。われ等は一声の念仏によって重罪が滅せられ、九品の蓮華台上に往生できることを疑ってはならない。宋の宝曇は次のようにいっている。

『浄土の法門は善人悪人の区別をしないというのに、愚かなために迷っている凡夫は悪人の往生は難しいと疑っている。しかし仏にできないことは何もないのである』

この言葉も仏の智慧が勝れていることを述べたのである。それなのに愚かな心で仏の力を軽く考えるのは、特に重い罪咎であるといわなくてはならぬ。このような重い罪の報いは間違いなく地獄におちるのが当然である。それなのに世に超えた仏の慈悲は、それでもなお辺地ならばと往生を許し給うている。まことに仏の恩は有難いものであるとつくづく感心させられる。ましてひたすら本願を信じ

て念仏を唱えている者が、どうして九品の浄土に往生できないわけがあらうか。ますますもって頼もしい限りである」(西要鈔)

仏の慈悲は辺地の宮殿に胎生往生した者にも及ぶのである。もし仏の智慧を疑ったことを後悔し、胎生から逃れたいと願えば阿弥陀仏のみ許に詣でることができ。經典は次のように説く。

「仏の智慧を疑ったために辺地の宮殿に往生したといっても刑罰を受けることがなく、悪事にあうこともない。ただ五百歳の間は三宝を見奉ることができないし、仏を供養することができないために功德を修めることができない。これだけが辺地に往生した者の苦難なのである。この人々はたとえ多くの楽しみがあったにしても、決して胎生のままでいることを願わない。ただし胎生の人々が仏智を疑ったことを深く後悔し、胎生から逃れたいと望むならば、その者は願いの通りに阿弥陀仏のみ許に詣でて恭しく供養することができ

る」(無量寿經)

極樂淨土には楽しみだけがあつて苦しみのない世界である。經典は次のように説く。

「舍利弗よ、この仏の世界をなぜ極樂と名づけるのであろうか。それはこの仏の世界にいる人々はどのような苦難にあうことがなく、ただいろいろな楽しみだけを受けている。こうしたわけで、この仏の世界を極樂というのである」(阿彌陀經)

極樂往生すれば楽しみを受けて安穩に暮してゆける。經典は次のように説く。

「阿難よ、阿彌陀仏の極樂淨土に往生したすべての人々は身口意に勝れた特性をもっている。身体は清淨であり、口に妙なる音声をもち、心に神通力の功德を具えているのがそれである。住んでいる宮殿、日常に用いる衣服と飲食、莊嚴具としての妙華と香等のすべてのものは天界と同じように自然に備わる。もし食事をしようと思えば、その人の前に七宝の食器が自然に現われ、その中にその人が望

む通りのいろいろな食物が満されている。ただし食物が目の前にあつても実際に食べる者は一人もなく、ただ食物の色をみ、香りを嗅ぎ、心の中で食事であると思つただけで自然に満足する。淨土にいる人々は身も心も柔軟であつて、食事に執着する心がない。食事が終れば食器と食物は自然に消え去り、食事の時刻がくれば自然に食器と食物が現われる。阿彌陀仏の国土はこのように清淨であり安穩であり、微妙な快樂は静かな悟りの道に次いで尊いものである」(無量寿經)

極樂往生した人たちは互いに楽しく談笑し合っている。善導大師は次のようにいった。

「往生人はあるいは語り、あるいは笑つて身心ともに楽しみながら娑婆世界にいた時の人々の様子を思いやっている。それぞれに誓願をたてて、遙かに遠くにいる人々を助け護っている。そして願つていうのに『専ら念仏を唱えて退失することなく、皆ことごとく極樂淨土に往生して欲しいものである』と」(般

舟讀

われ等は愚かなために誤った四つの考え方をしているが、これを四顛倒という。一には常顛倒である。この世のすべてのものは変化し続けていつて止まることがないのに、いつまでも変わらずに同じ状態のままにいると思ひ込んでゐる誤りである。二には楽顛倒である。この世は四苦八苦の世界である。四苦の生老病死は人の力で避けることができない自然の変化であり、結末である。八苦は四苦に愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五陰盛苦を加えたものである。いかに愛着を持っていたも、何れは別れなければならぬ。いかに怨み憎んでいても、いつかは会うことになる。欲しいものを求めて得たいと願っていても、容易に得られないのも止むを得ない。このようにして物質的にも精神的にも願ひの通りになるものが何一つない。これまた人の力でどうにもならない実状であるのに、求めれば常に楽しいことが得られると思つてゐる誤りで

ある。三には淨顛倒である。この世は不淨なもので満ちてゐるのに、清らかであると思つてゐる誤りである。四には我顛倒である。この世に永遠不滅な主体がないのに、我ありと執着してゐる誤りである。わが身の外見をいかに飾つても、中味が不淨であることに變らない。善導大師は次のように説いた。

「人は皮膚の下に驢馬と同じ骨格を包んで迷ひ狂つてゐる。何れは地獄、餓鬼、畜生の世界におちてゆくのであるが、何も自ら争つておちてゆくことはない」(法事讃)

人には貪りと怒りのために迷ひ狂ひ、愚かさのために他人を輕んじて争つてゐる。このような者でも念仏を唱えれば極樂往生することが出来る。往生すれば煩惱を滅して悟りの境地に入り、そこでは常樂我淨の德を受けることができる。証賢は次のようにいつた。

「極樂往生した者の第一の德は常であつて、いつも變らない永遠の生命を得ることが出来る。極樂淨土に変化したかゝるものが

ないので、そこでは限りなく長い命を保つことができる。仏と同じように老いることもなく、病もない身であるから何年経っても少しも変らない。

第二の徳は楽しみだけがあつて苦しみがなく、苦しみという言葉を書くことすらないということである。地獄、餓鬼、畜生という悪世界に通ずる道がすべて閉ざされているから、再び悪世界におちる恐れがない。聞く音、香り、味わい、身に触れるもののすべてが清浄であり、心で欲しいと思つただけで直ちに目の前に現われる。こうして身に受ける楽しみは尽きることがない。

第三の徳はもともと誰でも持っていた真実の我が現われて、仏と同じく穢れを離れた清浄な身となることである。同じく我といつても本性の我のことであるから、生滅変化しない永遠の生命を保つ我である。

第四の徳は淨い身体になることである。身体は玉のように透き通つていて、肌は紫金色

に輝き、身体から放たれている光明は日や月より明るい。それというのも生きた父母の身体から受けた骨肉でなく、香り高い清浄な七宝の蓮華台の上に自然に生れた身体であるためである」(父子相迎)

極楽往生すれば限らない楽しみを受けながら永遠の生命を保ち、安穩に暮している内にやがては成仏できるのである。このことも知つて一人でも多くの人々と共に極楽往生したと願わなくてはならない。善導大師は次のように説いた。

「生涯を通じて修める行はいささか苦勞のうちに思えるが、寿命を終つて極楽浄土に往生できれば直ちに永遠の生命に帰一できるのである。しかも法を信受して喜び楽しみ、やがて自然に仏になれる。これ以上の楽しみが他にあるというのであろうか。この最高の楽しみを受けるために、誰でもが念仏を唱えなければならぬことをよく承知していなければならぬ」(往生礼讃偈)

(つづく)

み仏とともに

=18=

—み仏たちの群像—



やす い こう さん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

私がこうして、今日まがりなりにも一人前の人間として、働かせて頂けるようになったのは、多くのみ仏達のお蔭のたまものである。両親の生育に始まり、多くの養父母たちの手を経て、私は育てられてきた。その間、陰に陽に私を支え、励まし、教え、鍛えてくれた数多くのみ仏たちがいた。今まで綴ってきたものは、その中のほんの限られた数のみ仏たちのことであつた。

思い出を辿りながら、こうしたみ仏達のことを書いていくと、この小伝は数限りなく続きそうである。本来は、私を生み育て、そして仏門に入れてくれた両親のことを中心として書く積りでいたが、波瀾に豊んだ私の生涯のこととて、両親のことだけではこと足りず、多くのみ仏達がこの紙面に登上してくることになった。これもまた、み仏達のご恩に報いるの一途かと、私なりに心なぐさめて綴り続けている。

こうしたみ仏達の中で、私がそのグループの一人であるために、そのグループのみ仏達によって大きく支えられ、力づけられ、導かれているみ仏達の群像が幾つかある。

その一つは顕浄会というグループのみ仏達である。こ

の会は、仏教専門学校（今日の仏教大学）から大正大学に進学した人びとの集りである。私達は徴兵延期をして仏専から大正大学に昭和十七年四月に入学したのであるが、当時、仏専から大正大学に進学するということは、選ばれた好運児であって、それだけに頑張らなければという意気込みがあった。幸い、この時佐藤密雄先生が、仏専から大正に移られるということもあって、親仏と大正に來たようで、心強かった。

「切角、京都から揃ってやってきたのであるから、何か一緒に勉強会をやるうではないか」

親分肌の渋谷賢応君（長野、心光寺）がいいだし、月に一回何処かに集って勉強会をすることになった。これというよい集り場所が無いままに、同僚の加藤秀輝君の目白の下宿で第一回目をやった。加藤君は仏専から早稲田大学に入った俊秀であって、明るくほがらかな人であった。そしてこの人だけが、顕浄会仲間では戦死をしている。人の一生などというものは、全く分らぬもので、今更のように思いを新たににして、追憶にひたっている。

その内に、佐藤密雄先生より、佐藤良智先生を紹介頂き、それ以後は小石川の光円寺を会場にお借りして、或る時はテーマを掲げて討論し、或る時は、各人が研究したことを発表して批判しあったり、書評会をやったりと、大いに得るところがあった。仏教関係の人が多かったこともあって、中国哲学をやっている私などは、いささか異分子的存在で、苦勞したが、それだけに又学ぶことも多かった。知識欲旺盛な当時であって、この会は私にとって大きな力を与えてくれた。又、大東京にそれぞれ孤立している中であっての連帯は、何かにつけ力強かった。

顕浄会という名は、確か真野孝信君（現宗議）が、椎尾辨匡先生に常隨されていたこともあって、ご意見を拝聴し、「研浄会という名がどうか」ということであつたようである。しかし、その後、佐藤良智先生のご意見もあって、顕浄会としたように覚えている。いずれにしても、この会の名称には、大先生のいきがかかっているのである。

研究会は夕刻からやるのが通例で、毎回、良智先生もご参加下さった。その頃物資も不足勝ちで、他人の家で



——仏専同窓会（鴨川会）、昭和17年、於増上寺
三枝樹、塚本、江藤、佐藤良智の各先生——

夕食にあずかるというようなことは、大変なことであったが、良智先生ご夫人のおもてなしで、研究会後は何かご馳走になったことを覚えている。特に度々うどんを頂いたことが、私の印象に残っている。その頃、一粒種の良純君はまだ十歳ぐらいで、時々われわれの囲りを走り廻っていた。今ではその彼も、立派な大正大学助教授であり、今昔の感に堪えない。

われわれの大正大学生時代は、前にも書いたように、一年生の時はどうやら勉強もできたが、それでも工場に勤労働員に出かけたり、軍事訓練に追いまくられたり、落ち着いた勉強もできなかった。そうした中での頭洋会の存在は、得難い勉強の場であった。

戦雲漸く急を告げ、昭和十八年の秋、いよいよわれわれは学業半ばにして、軍隊に入ることになった。十月二十一日神宮外苑で行われた学徒出陣式に、われわれも校旗を先頭にして参加した。勿論、誰しもが生きて再びあひ会う確信はなかった。それは今生の別れの時でもあった。

「お別れ会を、盛大にやろう」

そう良智先生が提唱され、多分箱根に皆を連れていて下さり、一夜を語り飲み明した。それは学生生活の最後の思い出として、今尚、私の脳裏にある。私達はこの出陣を最後に学窓を去り、出征中に卒業証書をもらっているのである。従って、卒業論文を書いていない唯一の学年である筈である。

昭和二十年八月十五日戦いは終り、散りぢりにいろいろの道を辿って帰ってきた。赤尾敏弘君（兵庫、称名寺）のごときは、二年程もシベリヤに抑留され、身の毛もよだつような辛酸をなめてきた。よくぞ生きて帰ったものと、その話を聞いて涙した。長島善雄君（石川、心蓮社）は、左腕を切断する重傷を負ったが、とも角、帰ってきた。内田信宏君（島根、信楽寺）丹羽演誠君（大分、正念寺）らも、それぞれ苦難の道はあったと思われるが無事であった。真野龍海君（大正大教授）は、身体が少し悪かったことが幸いして即日除隊となり、大学に帰った。戦時中の空襲下にあつて、梵文原典にかじりつき、研究室や大学を死守したのは、真野君であつた。大いに勉強もできたと思われるが、又大変であつたようである。そして

不幸にも、前に述べたように、加藤秀輝君のみが帰らぬ人となった。

もう一人江夏覚信君がいたが、この人は病弱で、在学中に急逝され、悲しみの追悼会を光円寺でやったことであつた。

戦後の混乱と、物資不足は、国民全体を塗炭の苦しみに追い込んだ。われわれも、そうした苦難の中で、再生の途を模索した。食う苦しみというものを、これ程までに味わうということは、戦争や、敗戦を体験した者でなければ分らぬことであろう。ただ空襲もなく、弾丸も飛んでこない平和な世界の到来は、何としてもありがたいことであつた。そして顕浄会員も、時日の差はあつたが、加藤君を除いては全員無事帰ってきた。両佐藤先生などは、吾が事のように喜んで下さった。

終戦も何年たってからのことであらうか。すでにその時日も忘れたが、

「皆が帰ったのだから、又、箱根で集ろう」

と良智先生の提唱があり、全国から皆が集ってきた。再

びゆかたにくつろぎながら、先生を囲んで戦時中の苦勞話に夜を明したのは、つい先頃のことと思っているが、もう四十年程も前のことなのである。月日のたつのは早いものであるが、この顕浄会同人は、その後それぞれの分野で、一隅を照しながら元気で頑張っている。

恩師佐藤良智先生は、昭和五十三年十一月二十六日遷化され、われわれの心情の中に一つの空洞ができた。然し、佐藤密雄先生はお元気で活躍されており、われわれの心の支えとなっている。勝手な希望であるが、いつまでもお元気でわれわれを支えてもらいたいと願うのは、皆のいつわりのない気持ちである。

顕浄会には、戦後加わった一人に新保義道君(前ハワイ開教総長)がいる。彼は同級生であるが私より三つ程年上で、仏専卒業と同時に出征し、私が敦賀に入隊した時は、すでに少尉殿であった。友人でありながら、二等兵である私はどうすることもできず、直立不動の敬礼をしたものである。そんな縁もあって、特に親しくなり、親友の一人としていまもつきあっている。「ハワイで骨を埋めてこい」と言ったのも私であったが、彼はその通りやり通した。近く彼は、「ハワイ開教九十年史」を上梓す

るが、この出版にも皆で協力しようと考えている。つい一週間も前に、大学の所用でハワイに行ったが、彼に会えるのが私にとっては、この上ない喜びであった。顕浄会のきずなは、今でも会員相互の中にこうして生きつづけているのである。

(つづく)

Ⅱ新刊Ⅱ

竹中 信常著

『宗教的体験と人格』

A5判 上製函人 三九五ページ

定価 九五〇〇円

△発売▽

山喜房仏書林

〒133 東京都文京区本郷五―二八―五
(振替) 東京 〇―一九〇〇

昭和62年度版

浄土宝暦

—三上人遠忌慶讃記念号—

予約発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
昭和62年度版がまもなく刷了となります。年末年始の好便
な檀信徒用施本として、広くおすすめいたします。

B 6 判 総ページ数 40ページ

一部単価 65円 (200ブ以上 特価60円)

送料実費 (300ブ以上はサービスします)

◎なお、ご寺院名の印刷なども実費にておこないますのであら
かじめご連絡下さい。

できうるかぎりの便宜もおはからいいたしますので、多くの
方々からのご注文をお願いいたします。

.....お申込み.....

〒 102 東京都千代田区飯田橋 1—11—6

法 然 上 人 鑽 仰 会

(振替) 東京 8—8 2187

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記(十二)

—天—
水—



木きの
下した
隆りゅう
一いち

(随筆家)

窟龕巡りの一行の下山は、予定の時刻をはるかに超えていた。元気なのは三人の若者とカメラマンのS氏ぐらいのもので、皆さんかなりお疲れの様子であった。

「どうだった？」

とG君に聞くと、

「景色はよかったけど、草臥れました。先輩行かなくてよかったですよ」

と、げんなりして見せたが、これは素晴らしい景観を目にする事なく終わった私への、心やさしいボ

ーズであった。

「しかし、なんのために、あんなに穴を掘らなきゃならなかったんですかねえ」
「山の向こうに、桃源郷があると信じたからさ」



——麦積山への往路、立往生したバス——

咄嗟の答えを、G君が聞き流してくれたのは、私にとっては幸いであった。深く追及されれば私は返事に窮して、口から出まかせにこんな事を喋る破目に陥っていたに違いないからである。

戦火を逃れて、最初にここに辿り着いたのは、流亡する難民だった。財を持たない人達は身軽だからね。水清く緑豊かなこの地を見て、陶淵明という詩人が言った桃源郷はここか、と思ったかどうかは知らないが、安住の地を得たと思ったのは

確かだろう。そして山野を拓いて五穀を蒔き、獸を狩ってささやかに暮らしていたが、その難民の後を追ってやって来たのが、財力に物を言わせる富貴の人だった。それが役人だったか武人だったかはたまた商人であったかは定かでないが、先住者は支配下に組み込まれて、農奴に墜ちる他はなかった。富貴の人が来た時点で、この地は桃源郷ではなくなってしまったんだよ。その頃、仏教という新しい文明が西の方から伝わって来た。これに逸早く感化されたのが、虐げられた農奴の若者達だった。年寄りと違って、若者は新しい物には直ぐ飛びつく柔軟性を持っているからね。仏教は既成の道教や古くさい土俗信仰などにはない魅力を秘めていた。仏教を伝えたのが紫髯緑眼のイラン系の僧であったか、天竺の僧であったかははっきりしないが、まあそんなとこだろう。麦積山の開祖とされている曇弘が、中国人だったという証拠は何一つないんだから。彼等は仏の教えの他に様々な技術を伝えた。窟を掘る事もその一つだった。若者達は山の彼方に桃源郷を求めて、梯子を懸け棧を渡して、あちらこちら掘ってみたものの、桃源郷へ到達するのは容易ではなかった。東の崖から掘り始めて南へ廻り、裏側の西の崖に到って彼等が見たものは、桃源郷ではなく、果てしなく続く秦嶺の大森林だった。いつの頃からか、彼等は窟の中に仏を祀り、壁に飛天を舞わせ、曼荼羅を描いて仏の慈悲にすがった。つまり彼等は仏教の中に心の拠り所としての桃源郷を見出したという訳さ。そして、いつかそこを浄土と呼ぶようになった……。

帰途は平穩であった。往路難渋した河原の崖もなんなく滑り降り、工事をしている人達と手を振りあって別れを惜しむ。甘泉の町は相変わらずの賑わいで、肉屋の店先には屠られたばかりの大豚が、吊り下げられて血を滴らせていた。目をそむけたくなる光景だが、新鮮さを強調するには、これが一番手っとりばよい。売り物であると同時に、看板の役も果たしているのである。

朝食を摂った食堂で、遅い昼食を済ませて外に出ると、忽ち人だかりがする。「なんだかスターになった気分」「俺、三浦友和」「何おっしやいます、宇津井健さん」と若者は屈託がないが、少々迷惑な気がしないでもない。無言で緘きあつて取り囲むのであるから、不気味ですらある。若者達が口にしてゐるのは、山口百恵主演のテレビ映画「赤い疑惑」についての事であつた。これが、いま中国で「疑血」というタイトルで放映されて人気を呼んでいると、日本を発つ前に聞いてはいたが、街頭の貸本屋に豆本（文庫本の半分程の大きさ）の「疑血」シリーズが十数冊、「三国志」や「水滸伝」に伍して並べられているのを見て、ブームは本物だという感触を得た。ストーリーはともかく、衣裳を取っ換え引っ換え登場する、百恵のファッションが受けているのである。「疑血」の百恵は、私の年代で言えば、「ローマの休日」や「麗しのサブリナ」のオードリー・ヘップバーンといった所であろうか。映画が公開されるや旬日を経ずして、落下傘スタイルワンピースやサブリナパンツの女の子が巷に出現したのを思い出すが、中国の娘達も、ファッションにはとりわけ敏感なようである。

午後のスケジュールは漆器工場の見学であつたが、見学組と招待所で休息する組とに分かれる事になった。私は逡巡したが、「こちらに来ませんか」と佐藤博士に誘われたのと、「そうなさいませよ」と美智子さんに勧められて、休息組に入れて頂く事にした。余程草臥れた顔をしていたのであろう。招待所に着いて案内されたのは、天井の高い殺風景な部屋であつたが、室内には鉄製のベッドが二台と、机、椅子、帽子掛、それに安楽椅子が一つ置かれており、入口を入ったすぐ左側に浴室と便所を兼ねた部屋があつて、一応の宿泊設備は整つていた。半端な時間だったせいか風呂の湯は出ず、博士は冷水で体を拭かれると、早々におやすみになった。二本程煙草を灰にして、私もベッドにもぐり込んだが、肩の冷えて、四十分足らずで目が覚めてしまった。この辺り、海拔はどのくらいなのであろうか。窓から吹き込む風はいささか肌寒かつた。博士はと見ると、体をまるめて軽くいびきをか

ておられる。毛布一枚ではいかにも寒そうである。窓を閉めて、失礼とは思ったが、私の毛布を掛けて差し上げる。欲を言えば、もう一、二枚毛布が欲しい所であった。

夕食は別棟の清真食堂で摂る。イスラム教徒のための特別の食堂である。これだけでもこの地区にイスラム教の信者が多い事がうかがえるのである。頃合いを見計らって駅に向かうが、空は一面の雲で、名月は望むべくもない。

駅に着くと、ハブニングが待っていた。予定の列車に我々の席が確保されていないというのである。招待所員、駅員、ガイドの王さん、それに添乗員の寺山さんも加わって、それぞれの立場で語気鋭くやりあうが、一向に埒があかない。そうこうしているうちに、列車はさっさと出て行ってしまった。二時間おきぐらいの間隔で列車は走っているらしく、なんとか後続の列車に乗れるよう折衝が続けられるが、徐々に間隔が狭くなり、その間駅前の建物で待機を余儀なくされる。お世辞にもきれいな建物とは言い難いが、さすがは大人の集団、誰一人不満を漏らすでもなく、室内の空気は至って和やかなもので、「お茶会の真似事でもしますか」

と、藤原さんがトランクから例のコンパクトな茶道具を取り出したのは、この席であった。

「月牙泉で出来なかったから、月見を兼ねて……とは言っても、月はさっぱりですなあ」

箱が開けられると、嗟嘆の目が茶道具に集まった。ポットの湯というのが残念だが、この際贅沢は言ってもらえない。藤原さんのお点前の後はご婦人方に委ねられて、手際よく点てられ、湯呑に注ぎ分けられて配られる。宇治の、それも極上の抹茶、一口含むと、えも言われぬ味と香りが口中に拡がり、蘇る思いがする。至福とはこれか、と私は思った。

「あら月が……」

という声に、窓に目をやると、こうもうまくお膳立出来たものよと感心するくらいタイミングよく、

月が雲間に姿を見せていた。私にも、いや皆さんにとっても、一期一会の、異郷で仰ぐ名月であった。ゆっくり時は過ぎ、蒼白な顔の王さんが交渉の結果を告げたのは、なおしばらくしてからだった。「次の列車に空席はありませんが、途中で降りる人がいるので、なんとか席は確保出来そうです。但し、硬臥車です。その後の列車には八つだけ軟臥車の席があります。ご高齢の方は後の列車にお願いしたいのですが……」

列車の割り振りは直ぐに終わった。気丈な王さんも気がゆるんだのか、机に突っ伏すと声を殺して泣いた。貴女のせいじゃないんだから気にしないで、と口々にご婦人方が慰める。そのやさしい心遣いが一層彼女の慟哭を誘った。むしろ非難された方が、彼女にしてみれば気が楽だったかも知れない。「蘭州であれほど念を押したのに……」

と彼女は唇を噛むが、このハプニングには何か計りしれぬ大きな力が作用しているような気がしてならなかった。後に、後発組の人達の話の総合すると、車内には軍人の姿が多く見られたという。それも従卒を伴った将校の姿が……。想像であるが、国慶節を前にして、軍の幹部クラスの大異動が行われたらしい。そう考えると、駅員が見せた困惑げな表情の説明もつくし、万事辻褄が合うのである。先発組の乗車時間が迫っていた。残る人達に慌ただしく束の間の別れを告げて外に出ると、降り注ぐ月光で泥濘の路面が光って歩きづらく、ホームまで百メートル足らずの距離なのに、意外に時間を食ってしまった。トランクがずしりと肩に重い。列車はすでに入構していた。駅員に導かれて我々が乗ったのは食堂車であった。取り敢えず、ここで待てという事であろう。車内は混んでいたが、ボーイ長格の若い男が威勢よく一席ぶつと、客は立ち上って、我々のためにテーブルを譲ってくれた。「日本人が困っているんだ。中日友好のために席を空けてやれ！」と若い男はそんな事を言ったのかも知れなかった。笑うと、若い頃の北島三郎によく似ていた。

(続く)

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』九月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、本年の正月号より、松浦春子先生の清楚な作品を頂戴しております。今回も、松浦先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の小林治郎先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋二―二―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

「ああ、そんなことが出来ましようか。ちょっと思いうかべるだけで身ぶるいが出てしまいます」

「その身ぶるいを、恐れずにくり返しなさい」

善導は断固たる態度である。

「身ぶるいをくり返して……わたしは泣きくれるだけでございましょう」

「悲泣両涙、泣けるだけ泣くがよろしい。場合によっては全身から血が噴き出てくるかもしれない」

「身も世もなく泣きむせんで……」

「念々に称名して、つねに懺悔するのです。」

懺悔の極み、流涙し流血してむせび泣くなかで阿弥陀仏の御名をおとなえするのです」

善導はその「観無量寿経」の注釈（「観経四帖疏」）の至る箇處で懺悔の重要性を説いている。

その序文で、韋提希夫人が我が身を嘆いて
 積尊に哀訴する。夫の頻婆娑羅王は我が子阿

闍世太子のため城内の高樓へ幽閉された。食物も与えない。韋提希夫人はひそかに蜜を身体に塗りこめて獄房を訪れ、夫に舐めさせて飢えをしのがせた。これを知った阿闍世は母親をまで殺そうとする。

前世にどんな悪因縁があつて、わたしは自分が生んだ息子に苦しめられねばならないのか。聞けば阿闍世太子が悪くなったのは積尊、あなたの従弟である提婆達多の指導による、と言われている。

積尊よ、どうしてくれるのか、と言わんばかりの哀訴に積尊はまず懺悔して心を洗い清めることをすすめる。仏の慈悲とは言うが、人間が心から悔いあらためなければそれを期待することはできない。

また正宗分定善義の「日想観」の注釈でも、

——行者、もしこの相を見れば即ちすべからく道場を嚴飾し仏像を安置し、清浄に洗浴

歴劫周回すれども出づべきによしなし。

仏法をそしり、また親殺しなどの五逆罪を犯した者は、「無量寿経」の四十八願ではこれを除外している。彼らは阿鼻地獄へおちて永遠に脱出することはできない。

——ただ如来は、それこの二過をつくらんことを恐れて、方便して止めて往生を得ずと言ひ給う。またこれ撰せざるにはあらず。また下品下生の中に五逆を取って謗法を除くことは、その五逆はすでにつくれり。捨てて流転せしむるべからず。還って大悲をおこし、撰取して往生せしむ。しかるに謗法の罪はいまだつくらず。また止めて、もし謗法を起さば即ち生ずることを得ずと言ひ給う。これは未造業について解するなり。もしつくらば、また撰して生ずることを得せしめん。かしこに生ずることを得ると雖も華は合して多劫を得ん……

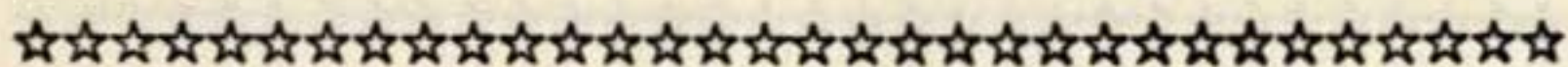
仏はこの二つの大罪を往生できないとしたのは方便であって、その者と雖も懺悔して、念仏を唱えることによって阿弥陀仏の救済をこうむり浄土に往生できる。また下品下生者で正法誹謗について説いていないのは、釈尊の法門に帰依している者には謗法者はありませんとするからである。もしも帰依する以前に謗法を犯した者がいたとしてもその者に阿弥陀仏の慈悲が及ばないわけがないから、やはり懺悔して念仏を唱えれば同じように救われて浄土に往生できる、とする。

「あなたは五逆罪をおかし、かつ謗法者でもあった」

善導はすばりきめつけてきた。

「五逆罪はともかくとして、謗法者とはどういうことでしょうか。わたし、一度たりとも仏法をないがしろにしたことはございません」

則天武后は抗議めいた口吻になった。



下品下生



ずとおもいて、人間を輕賤する者あらん。

——利養に貧著するが故に白衣のために法を説きて、世のために恭敬せらるること、六通の羅漢の如くならん。この人は惡心をいだき、つねに世俗の事をおもい、名を阿練若に仮りて好んでわれらの過（とが）を出し、しかもかくの如き言をなさん。

——「このもろもろの比丘らは、利養をむさぼらんがためのゆえに外道の論議を説き、自ら經典を作り、世間の人をたぶらかし、名聞を求めんがためのゆえに分別してこの經（大乘教）を説くなり」と。つねに大衆の中にありて、われらをそしらんと欲するがゆえに国王・大臣・婆羅門・居士、及び余の比丘衆に向いて誹謗し、わが惡を説きて「これ邪見の人なり。外道の論議を説くなり」と謂わんも、われらは、仏を敬い奉るがゆえに悉くこのもろもろの惡を忍ばん。

——これのために輕んぜられて「汝らは皆、これ仏なり」と言われんも、かくの如き

輕慢の言をば、皆まさに忍びてこれを受くべし。濁劫の惡世中には多くもろもろの恐怖あらん。惡鬼はその身に入りて、われを罵言し毀辱せんも、われらは仏を敬信し奉るを以て、まさに忍辱の鎧を著るべし。

——この經を説かんがためのゆえ、このもろもろの難事をも忍ばん。われは、身命を愛せずして、ただ無上道のみを惜しむなり。われらは、來世において、仏に囑せられしところを護持せん。世尊は、自らまさに知り給うべし。濁世の惡比丘は、仏の方便の宜しきに随つて説くところの法を知らずして、惡口して顰蹙し、しばしば擯出をあらわして塔寺より遠離せしざるを。

——かくの如き衆惡をも仏の告勅（戒）をおもうがゆえに、皆まさに忍ぶべし。もろもろの聚落、城邑にそれ法を求むる者あらば、われは皆そのところに到りて仏に囑せられし法を説かん。われはこれ世尊の使者なられば衆人に処して畏るる所なし。われはまさに善

念仏無間(むげん)と法然を罵倒した日蓮の主張である。

日蓮が世に現れたのは十三世紀の中葉である。法然が寂して数十年を経ている。日本列島に隅々まで念仏の声がこだましていた。比叡山で修行した日蓮は、この「大衆主導型」の仏法拡大に危機感をおぼえた。体制派仏教の復活を熱望した。そこには蒙古襲来という国家の危機も濃厚な背景色となっていたことであろう。

天台教学の軸点を形成する「法華経」の唱導に身命を賭けた。折伏と諫曉のくり返しである。

折伏とは、異法を信ずる者をとことん説伏する行動である。諫曉とは、為政者をすべて「法華経」信者に転宗させることだ。

ここで注目すべきは、末法末世の仏法思想が現実化したこの時期、法然は「専修念仏」なる一信一行を大衆に訴えた。禅思想の道元もまた「只管打坐」を唱導した。この単純

で、一つの行実践に徹する手法を日蓮自身も踏襲したことである。

その一信一行をえらぶのが選択である。法然は、だから「選択本願念仏集」を編述した。「偏依善導」として、善導の念仏を乱世の日本社会へひろめたのである。

同じ手法で法華の「題目唱号」を主唱した日蓮にとって、この「選択集」は打破すべき絶好の標的であった。「念仏無間」「禪天魔」「真言亡国」などのスローガンが次々と日蓮の口唇からほとばしり出た。他宗を罵倒し尽すことでおのれの立場を強化させた。

いかなる宗教にあっても、その教派内で信奉する教義の勝劣を論じ合うのは日常のことである。仏教においても、大小乗は長い歳月にわたり、東アジアの各地で論じ合われてきた。

日蓮がこの時期、念仏や禅をいくら罵倒しても悪徳行為とはならない。問題はその勝劣を争う場が人間大衆の「心の問題」としてと

いう条件が守られねばならない。

「法華経」は前掲の「勸持品」で「耐え忍ぶ」ことを強調している。いかに小乗教徒に罵倒されても屈することなく、仏の使者であるという強い自覚に立って、この「法華経」を大衆に説き聴かせるのである。

日蓮の飛躍は「立国安国論」にある「……早く天下の静謐を思わば、須らく国中の謗法を断つべし」の言葉だ。誰が、どうやって謗法を断つのであるか。前後の文脈から考えて国権による強圧以外にはあり得ない。

法然における念仏教化の姿勢は神経質とも思われるほど「権力」との接触を避けている。九条関白兼実のような時の高官を信者としながら政治的な動きを全くしない。比叡山から強圧を受ければ門人に「七箇条の制誡」を発して、その過激な行動をいましめた。門弟の不祥事によって自ら縛に就き、四国へ流罪へなったときも文句一つ洩らさない。

これを機会に辺鄙な地方人に念仏教化が出

来ることになった。むしろ「朝恩」である、とまで洩らしている。

この「朝恩」の言葉を言質として、法然が篤実な天皇制護持者だった、ときめつける近代の学者がある。これは面妖な説で、法然がこの言葉を発した状況を考えねばならない。すでに「念仏禁制」は全国津々浦々へまで発令されていたのだ。そのなかで辺鄙な地で念仏教化をすること自体が法に叛く行為ではな

いか。

法然が口にした「朝恩」は彼らしいソフトな皮肉であり、かつ表面では目立たないが心の軸芯で粘りづよく燃え続ける宗教者の抵抗感であった。現に門弟が一時的に「念仏をおやめになったら」とすすめると、「たとえ死刑に処せられても……」不退転な心底を覗かせている。

法然が天皇制の護持者か反対者であったか。そんなことは問題外である。善導が「観経疏」で書く「韋提希夫人が王后だったから

菩薩位へ解脱できたのではなく、心想劣弱な下品下生の女だったから阿弥陀仏の慈悲によつて……」という思想を正統に継承しているのである。不当に天皇制反対を騒ぎ立てなくとも、法然がそうした政治権力の行方なぞよりも遙かに高く「人間の救い」だけを凝視していたのは当然であろう。

さて余談はさらにひろがってしまふのだが、「謗法は（国権で）断つべし」と主張した日蓮の考え方が、この日本でどのように継承され、拡大されていったか。その行方をしばらく見守ることにする。

五

明治三十四年（一九〇一）の九月、田中智学は「宗門之維新」なる一書を上梓して、七千の僧侶、三百万の信者を擁する日蓮主義者たちに檄を飛ばした。いま、そのなかから目につく文章だけを摘記する。

——邪見謗法の世に処して、一刹那頃も非折伏の念、生ぜばこれ死（せる）法華経なり。これ靈的国家の死没なり。（中略）法華折伏の四字は無期限の「宣戦詔勅」なり。即これにこれを以て宗を立て「侵略的宗是」ならざるを得ず。

——すべからく「法華経は劔なり」といえ。老嫗も杖を揮て世界統一を説け。幼童も鼓を鳴らして「法華進軍の曲」を歌えよ。利のために祈るなかれ。身のために祈るなかれ。父母のために祈るなかれ。師のために祈るなかれ。ただ侵略のために祈れよ。侵略のために死せんと祈れよ。侵略に非ざれば言うなかれ。動くなかれ。視るなかれ。聴くなかれ。侵略的意味ならざる勸化に布施するなかれ。

——これを唱導啓発したる聖祖（日蓮）は正しく世界統一軍の大元帥なり。大日本帝国はその大本営なり。日本国民はその天兵なり。本化妙宗の学者教家は、その将校士官なり。

念仏をとなえつつも心中はつねに懺悔の浄流
がながれていなければならない。

さて、善導へ話を戻す。

国家権力を念頭におけば、とても発言でき
ないような言葉をずけずけと言いちらし、善
導は含風殿を辞去していった。

少年憚良は、不安の念がさめやらなかつ
た。宮廷で絶対権力を握る伯母である。しか
もおのれに叛く者は容赦なく殺してきた則天
武后ではないか。

「和上は、ずいぶんきついことを言いました
ね」

おずおずと伯母の眼をうかがわずにはおれ
ない。

「いいえ、わたしには少しもきつくはありま
せんでした」

「……」

「どんなに罵られても口答えなぞできないわ
たしなんですから」

「全身から血を噴き出させて懺悔せよ、とお

っしゃいましたね」

「さっそく実行いたしましょう。姉や姪のこ
とを思えば容易い業ですよ」

いつ、どうして、こんなにサマ変りがして
しまったのであろう。少年は不思議そうな眼
で伯母を見た。

「それから憚良や」

「はい」

「お前、どこから絵師を探がしてきておい
で」

「絵師ですって。何か絵でもかかせるんです
か」

「そう……あの人たちの肖像をね」

則天武后は亡き姉韓國夫人や姪魏国夫人の
肖像を描かせようというのだった。

(つづく)

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字用紙五〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十二巻 九月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十一年八月二十五日 印刷

昭和六十一年九月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二〇三 振替東京八一八二一八七番

第五十二卷 九月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十一年八月二十五日印刷 昭和六十一年九月一日発行